

活を同じ寺領であるからといつて、之を寺領別に綜合しやうとしても無理である。綜合すべき性質の對象と、綜合すべからざる性質のものがある事を明らかにして、正しき綜合が行はれねばならない。「石叢生の一考察」は正にこのよき綜合に立つ研究である。氏に於て更に望む所は、今後從來の如き、包摂的な精力的な史料蒐集に加へて、各事象の更に深い洞察檢討を以て、内容的綜合に向つて進まれん事あるのみである。我が身を顧ざる妄評、幸ひに著者の御寛恕をお願いする。(敵愾書房發行。昭和十七年一月刊、A六版五五五頁。定價六圓。敵愾史學叢書)(清水三男)

## 「中世日支通交貿易史の研究」

小葉田 淳著

中世日本經濟史の研究に於て、特に重要なる意義を擔つてゐる日支貿易の問題は、早くから、學界の關心事となつてをり、既に多くの論著が公けにせられてゐるが、その大部分は、政治史的觀點から大勢を概観してゐるものが多く、純粹に經濟史的な觀點から、貿易そのものを直接に研究對象としたものは、寥寥たる實狀に在る。それと云ふのは、貿易として考察するとすれば史料採訪の範圍が國內のみでは不充分であつて、支那・朝鮮・琉球等に互ることが必要であり、その量も莫大なところから、その全部に通曉することが容易でないのに依るのであらうが、その困難も、最近學者の眞摯なる努力に依つて、次第に克服されつゝある。かゝる

際に、昭和三年に本學を卒業せられてから、孜々として、日本中世經濟史の研究に専念しておられる臺北帝國大學助教の小葉田淳氏が「中世日支通交貿易史の研究」の大著を公けにし、日支兩國の史料を自由に驅使して、兩國の中世貿易に關し該博なる蘊蓄を傾けて、微細なる點まで、貿易の實勢を明らかにせられたのは學界のために、慶賀の念に堪えない。

本書の構成は、最初に日明交渉の開始と、明の對外政策を明らかにし、次いで遣明船の往來を時代を追つて説き、更に遣明船の經營及び組織として、船舶・乗組員・貨物・經營と收得・商人の參加の問題を究明し、その次には、明の市舶司・勘合・條約其他の制度を概観し、次には、商品の移動を主題として貿易の趨勢を觀察し、最後に日明交渉の開展として、明の一方的な立場よりする官貿易の中絶その反對現象として貿易の盛大とを取り上げて結論としてゐる。その所論の多くは、氏が先に神戸市の委嘱に應じて、神戸市史第二輯の別録として、著はされた「中世の兵庫と外國關係」及び臺北帝國大學文學部史學科研究年報に發表せられた「足利後期の遣明船通交貿易の研究」に見ゆるところであつて論證精緻、殊に遣明船の經營法、明の日明貿易に對する制度處置等の對策を論ぜられた處などは、名の工書が公刊の當時、既に學界の賞讃を博したところである。然るに、この書は共に特殊出版であつて、研究者でも容易に入手し難い憾みがあつたが、今回本書が印刷せられ、何人でも、これを讀み得るやうになつたのは、今後の日明貿易の研究に、大いなる利便を與へることであらう。

日本出版文化協會が良書として、本書を推薦したのも、この故に推察せられる。

只、本書を一讀して感ぜられることは、文體用語に古調が多く、一般の讀者には、理解が困難ではないかと思はれることである。これは著者が、事實を記述するに當つて、その根據とせられた史料の記述と、背離しないために、史料の原文をなるべくその儘に使用せられたそれに依るのであらうが、現在の如く出版界の情勢が往時とは異なつて、少數の學者の研究の利便と云ふよりは、一般の教養昂揚に、主目的を置くことを要求せられてゐる時には、今後は史學専門の著書であつても、行文はなるべく平易にし史料の考證などで、餘り専門的に互るものは、本文を擧げず、史料の記述でも、部分的であつて、そのまゝでは大勢を伺ひ得ないものも除き史料の原文、その解釋、批判等は、別編に纏めたならば、教養、研究相互に便利ではないかと考へられる。本書の如き専門書が推薦せられた機會に、これを提唱する次第である。(東京刀江書院發刊、B五版、四九八頁。定價五圓五〇錢)(赤松)

## 中世の社寺と藝術

森末義彰著

この書物は東京叢書房の企劃にかゝる、叢書史學叢書の第一冊として、學界注視の期待のうちに、華かに刊行せられたものである。この史學叢書は辻善之助先生と本書の著者森末義彰氏を編

輯顧問として、東大史料編纂所關係の俊英學士十三氏の近業を選集せられたもの、その種目は國史學のあらゆる部門に互つてをり今後陸續として出版せられる筈であるが、これらの權威ある好著のかず／＼は、逐次本欄にその輪廓を紹介されることであらう。さて本書は、中世の藝術が中世人の精神生活の源泉である社寺を母胎として生長發展したとの見地から、中世の藝術史はその社寺との關係を究明することなくして十分なる理解に到達し得ないとし、こゝに藝術及美術關係の座について、詳細に論攻せられたものである。第一部社寺と藝術關係の座に於いては、宇治猿樂・鳥飼猿樂・美麗田樂・散所が、第二部社寺と美術關係の座に於いては、南都繪所・附祈雨祈禱とその木尊圖繪の問題、及び長谷寺の炎上とその復興が論述されてみて、これらの特殊問題を通じて一般事情を窺知せしめるが如く仕組まれてある。こゝにその各篇について梗概を記述する紙面を有しないが、全篇を通じてその史料蒐集の甚だ廣域に互ること、その史料取扱の極めて合理的なること、この二點こそ本書の學問的價值を決定的ならしむるものであらう。

併しこの史料の合理的取扱は、時に實際事情と離反する危険がないでもない。一例を挙げると、宇治猿樂の奉仕した宇治離宮明神について、それが平等院の鎮守社であつたことを、氏は既定の事實の如く繰返へし説かれてゐる。これは恐らく中右記長承二年五月八日の「宇治鎮守明神離宮祭也云々」の記事から、合理的に考察せられたものに相違ないと思ふが、實際はこの「鎮守」が宇治及